

2018 年度 センター試験 日本史 B (本試験) 分析

全体概況

試験時間 60 分

大問数・解答数	大問数：6 題	解答数：36 問
難易度の変化（対昨年）	○ 難化 ● やや難化	○ 変化なし ○ やや易化 ○ 易化
問題の分量（対昨年）	○ 増加	● 変化なし ○ 減少
出題分野の変化	○ あり	● なし
出題形式の変化	○ あり	● なし
新傾向の問題	○ あり	● なし
<p>総評 大問別の配点比率は昨年と同じであった。難易度については、正誤判定と年代配列で従来より判別しにくい問題が多かったため、難化とした。例えば、年代配列問題では、文化史が題材となるなど、時期の判別がつきづらかった。文化史からの出題が小問 4 題から 9 題に増加したことも難易度を高めたと思われる。一方、出題形式に大きな変化はなく、写真・史料・地図問題などは従来通り出題された。昨年度に初めて出題された写真を利用した年代配列問題は、今年度はみられなかった。</p>		

大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	古代から近代の地域の歴史	16 点	自治体の観光課に配属された先輩・後輩の会話を題材とした出題。昨年同様、富岡製糸場など世界遺産を意識した問題であった。第 1 問は従来通り、図版・写真読み取りや史料の読解、地図問題が出題された。今年度は、2 枚の写真とその写真につけられた見出しや資料から地図上の位置を特定する問題が出題されたことが、新しい形式であった。
第 2 問	原始・古代の国家・社会と音楽との関係	16 点	原始・古代の国家・社会と音楽との関係性を題材とした出題であったが、音楽に直接関わる問題は史料読解だけであり、その他の設問は政治や外交に関するものであった。第 2 問全体の難易度は標準的であったので、確実に得点しておきたい。
第 3 問	中世から近世初期までの地震とその影響	16 点	中世から近世初期までの地震とその影響を題材とした出題であったが、設問にはほとんど関係はなかった。「都市」や「農耕」に関する問題など、社会経済史からの出題が中心であったため、正答の判別にやや迷う受験生もいただろう。
第 4 問	近世の外交・思想・宗教	16 点	文章 A は日朝関係を題材とした出題で、文章 B は江戸時代の宗教統制を題材とした出題であった。問 2 の年代配列問題では「亜欧堂田善」の活躍時期を「宝暦・天明期」と判断しないと正答を導けなかった。文化史は文化の時期区分を意識した学習が重要である。
第 5 問	幕末から明治維新期の軍制改革と西洋比較	12 点	昨年度同様、幕末から 2 問、明治期から 2 問が出題された。今年度は明治維新 150 年周年であったため、それを意識した問題であったと思われる。
第 6 問	ジャーナリストとしての石橋湛山	24 点	「石橋湛山」がジャーナリストとして活躍した時代からの出題。「石橋湛山」の論評読解が出題されたのは 2 度目である。また、昨年度は戦後史からの単独の小問は見られなかったが、今年度は従来通り小問 2 問ほど出題された。